
Tower of Babel

夕咲 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tower of Babel

【Nコード】

N3672X

【作者名】

夕咲 紅

【あらすじ】

MMORPGの一つであるTower of Babelをプレイしていた水原 悠人は、ゲームクリア時に貰える報酬として、ゲーム内容を根本から覆す選択肢である「異世界への旅立ち」を選択する。

その結果、悠人はその文字の通り異世界——Tower of Babelの世界へとトリップしてしまう。

最強クラスの能力を持ちながら、手探り状態で新たな生活を始める悠人。

突然訪れたセカンドライフ。悠人は自分の作り出したキャラクタ
ー、クロウとして今日も塔を目指す!?

＊全容の修正を開始しました。章管理を止め、話数で展開して
いきます。現状内容の変更はありません。

ブログ Tower of Babel (前書き)

軽いノリのお話を目指しています。作者はMMORPGへの造詣がかなり浅いので、その辺りは御容赦下さい。

プロローグ Tower of Babel

Tower of Babel.

数多くのMMORPGが存在する昨今、シンプルイズベストを突き進んだゲームの名前がそれだ。

広大な世界を旅する訳でもなければ、世界を混沌に陥れる魔王の様な存在がいる訳でもない。聖書で語れるバベルの塔。その名を模した果てなき塔をひたすら登り続けるだけのゲーム。しかしそれでいて数多くの職業や技能^{ジョブスキル}、アイテムが存在し、かなりのやり込み要素を誇る。

冒険活劇なんてない。それでも塔と言うダンジョンをひたすら攻略していく。

最上階が何階なのかなんて明かされていない。プレイヤーは、ただその頂きを目指すのみ。

最上階に辿り着けば、そこにおわす神に一つだけ願いをかなえてもらえると言う。

地上100階。

数々のトラップを潜り抜け、モンスターを薙ぎ倒し、何度も挫折を繰り返して辿り着いたその階こそが、タワーオブバベルにおける最上階だった。

おそらく、ソロプレイでここまで辿り着いたのは俺が初めてじゃないだろうか。

正直かなり疲れた……

厳かなエフェクトと共に現れる神――

画面上にいくつかの選択肢が現れる。

1・水晶貨一千万枚

水晶貨と言うのはタワーオブバベルにおいての貨幣で最大の物だ。最低硬貨が銅貨で、銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨100枚で金貨

1枚。金貨100枚で水晶貨1枚となる。それが一千万枚……
はつきり言って、ゲーム内で金を稼ぐ必要はなくなる金額だ。

2・レベルリセット

現在のステータスをそのまま引き継いでレベル1に戻るシステムだ。これは他にも専用のアイテムを使えば可能で、俺の知り合いにも行なった奴がいる。そうそう手に入る物ではないが……

それでも、100階到達ボーナスとしては微妙な気がするな……

3・神々の遺産

どうやら、通常のプレイでは手に入らない装備が手に入るらしい。と言っても貰えるのは一つ。魅力的な選択肢ではあるが、どうにも水晶貨一千万枚には負けるかな。

★異世界への旅立ち

何だこれ？ タワーオブバベルと言うゲームを根本から覆す様な選択肢だな。これだけ番号じゃないし。

ソロ攻略の特典か？

普通に考えれば、バベルの塔がある街以外のマップ開放とかか……

バベルの塔は何度でも攻略可能だが、攻略時のボーナスはその時によって違うらしい。その中でも特別な物っぽい★マーク……

やっぱ、これを選んでおくべきだろう。

俺は一番目の選択肢に後ろ髪を引かれながらも、異世界への旅立ちを選択した。

その瞬間、パソコンの画面が光ったかと思い――

俺の意識は途絶えた……

第一話 気が付けば異世界？（前書き）

本編一話目から三話目までを一つに纏めて一話にしました。
内容に変更はありません。

第一話 気が付けば異世界？

ぺちぺちと頬を叩かれる感触で、俺の意識はゆっくりと浮上した。

「大丈夫ですか？」

聞き慣れない声にそう聞かれ、俺はそれに答えようと口を開く。

「大丈夫」

擦れた声だったけど、何とか意識した通りに言葉を発する事が出来た。

「もしかして、塔から追い出されたんですか？」

目を開けると、倒れた俺を介抱していたのは知らない女の子だった。はつきり言って可愛い。

亜麻色のショートボブの髪に、くりっとして大きめの碧い瞳。多分小柄だけどそれなりに整った体型をしてると思う。

なんて女の子の見た目を冷静に分析してみて、違和感が付く。ここ、どこ？

とりあえず立ち上がって周囲を見回す。

どこかの路地裏っぽいけど、都会みたいに小汚い感じじゃない。どこかの田舎の民家の裏みたいな場所だ。と言うか、周りにあるのは木造か煉瓦造りの家ばかりだ。

それに目の前の女の子――

どう見ても日本人じゃないよね？

「あれ？ 違いました？」

ならどうしてこんな所に……みたいな目を俺に向けて来る女の子。
うん、まあとりあえず――

「いや、間違っないよ」

と言っておく。状況に流されるのは良くないけど、勘違いは利用
するべきだ。

「やっぱり！ でも、こんな所まで飛ばされるなんてついてないで
すね」

「そうでもないんじゃないかな。君みたいな可愛い子に介抱して貰
えたんだから」

おう！？ 我ながら誑しの発言！ 目の前の女の子が驚いた表
情を浮かべている。そりゃあそうだろう。知らない男にいきなりナ
ンパされたんだから。

「あ、ありがとうございます」

ちょっとだけ頬を赤く染める女の子。あら、意外と好反応じゃな
いですか。

「ところで、ここはどの辺り？」

ここはどこ？ なんてバカな質問はしない。それじゃあ自分は不
審者ですと改めて言っている様なものだ。だから地名か何かを聞こ
うとする。その場所からここがどう言った所か判断出来るかもしれ
ないからだ。

おお！ 俺ってば意外と頭の回転速かったのな。

「燕通りの裏手ですよ」

帰ってきたのはそんな言葉。俺の知る限り近所に燕通りなんて道はない。

けど、その通りの名前は物凄く聞き覚えがある。と言うか、個人的には自宅周辺よりも馴染み深い通りの名前だ。

「って言う事は、農村街の辺り？」

俺の厨二脳が今フル活動！ その確認の言葉を放つ。

「はい」

返って来たのは、俺の推論を確証に変える答えだった。

タワーオブバベルにおける唯一の街、ウォークル。塔を中心に円状に広がった巨大な街の西端に、農村街と呼ばれる地域がある。街の中にありながら農業を営む村の様な地域で、街の中心へと続くメインの通りを燕通りと言う。

「はははは」

思わず乾いた笑い声を上げてしまった。

みなはら水原 ゆうと悠人 18歳。大学進学を控えた冬。異世界にトリップしてしまいましたとさ――

「だ、大丈夫ですか？」

再びそう聞かれて、俺は我に返った。

大丈夫か？ いや大丈夫じゃないよ。精神的にはね……

「身体は問題ないよ」

とりあえず、そんな風に答えておく。

問題はたくさんあるけど、とりあえずは確認しておかないといけない事がある。

通りの名前や塔の存在。塔から追い出されたと言う彼女の言葉から察するに、間違いなくここはタワーオブバベルの世界だ。だけど、全てが同じである保証なんて何一つない。

気になる事はたくさんある。現在の街の仕組みは勿論、ここが本当に異世界だとするなら街の外だって存在するはずだ。だけど、今の俺には何が出来て何が出来ないのかも分からない。しばらくは安全な場所で生活の基盤を整えるべきだろう。

「それなら、私はそろそろ失礼しますね」

やはり不審者とも思われているのか、この場から離れようとする少女。

でも、今彼女を帰す訳にはいかない。だって大事な情報源だもの。

「ごめん、ちょっと待って」

「何でしょう？」

あまり警戒した様子もなく、立ち去ろうとするのを止めてくれる。あら？ 俺ってば意外と警戒されてないじゃないか。

「この辺にはあんまり詳しくなくてさ。近くで一番安い宿ってどこにあるのかな？」

これは方便込み、でも実際に知りたい情報だ。

ゲームと全く同じなら地理に困る事はないが、まずは地理がゲームと合致しているのかどうか知りたい。

「通りの表に出て、西に少し向かった所にある宿だと思っていますよ。と言うより、この辺りで宿って言ったらそこしかありませんから」

そう言って苦笑を浮かべる少女。うん、そんな顔も可愛いね。って違う！

農村街にある宿は燕通りにある燕尾荘ただ一軒。今の正確な場所は見分らないけど、おそらくゲームと違いはなさそうだ。

「名前は？」

「燕尾荘って言います」

名前も一緒だ。まあ、通りの名前も一緒だったし違うとは思わなかったけど。

「因みに、値段ってどれくらい知ってる？」

「えっと……確か、一人一日銅貨10枚って、表の看板に書いてあったと思いますよ」

なるほど。物の価値は判断出来ないけど、少なくとも通過は同じみたいだ。

「そっか。ありがとう。えっと――」

「モナカです」

そう言えばまだ名前聞いてなかったな。なんて考える間もなく、親切な少女はそう名乗った。

「ありがとう、モナカ。俺は水――」
みな

じゃなかった。ここは俺のキャラクター名を言っておくべきだろう。

「俺はクロウ。また縁があったらよろしく」

「はい。それでは失礼しますね」

そう言って笑顔で手を振り、モナカは表の通りへと出て行った。ゲームの中と同じ様に、この世界にはファミリーネームはなさそうだ。それにキャラクター名に物の名前を使っている点も同じ。

最初はふざけて付けたんじゃないかとも思ったけど、案外マッチしている様にも思える。と言うか、あの見た目なら多少名前が変でも許せるってものだ。いや、実際似合ってる様にも思えるけど。

まあそれは置いて。

表通りに出る前に、試しておかないといけない事がある。

まずは、ステータスが確認出来るかどうかかな。

タワーオブバベルにおいて、ステータス画面を見る方法は二つ。一つは画面内にあるステータス画面を開く為のボタンをクリックする事。

もう一つは自身が音声登録したショートカットキーを声に出して言う事。

タワーオブバベルは厨二連中に嬉れし恥ずかしくも、マイクを通した音声認識機能が備わっていた。スキル――技名とか魔法とか、もうバンバン叫びまくれて奴ですな。

俺もそんな音声認識機能を謳歌していた一人だ。画面と言うモノが存在しない以上、音声認識によるショートカットキーを利用する他には手立てがない。

「F2、オープン」

俺の場合、ゲーム機能的なショートカットは全てキーボードのFキーを思い浮かべ順番に振った。その方が分かり易いし。F1は何となく違うモノを想像しそうだったので欠番。

俺の言葉に反応する様に、目の前が薄暗くなり見覚えのある画面が現われる。

「おー」

何となく嬉しい。良かったよちゃんと見れて。視界は悪いものの一応景色も見えるし。

ふと気にかかり、横を向く。

画面も一緒に着いて来た。

はい。それが確認したかっただけです。

改めて画面を良く見ると、ゲームの時とは違う点がある。

「能力に関する数値が載ってないな……」

腕力やら何やら、そう言った類いの数値が全て載っていない。数値だけ消えているんじゃない、項目自体がない。

まあそれは良いや。今肝心なのは俺の強さではない。でもまあ、分かる範囲では確認しておこう。

キャラクターネーム、クロウ。それは分かってる。

性別、男。それも分かってる。

レベル、100。おお！俺カンストしてるじゃん。クリア前が99で、おそらくは塔のボスを倒した時に上がったのだろう。と言う事は、ゲームとリンクしているっぽい。なら期待出来るかな……

所持金、5000ウォール。

え？ 5000ウォール？ たったの？

あ……

そうか。塔攻略の為に結構浪費したんだった。それに、農場開拓に資金注ぎ込んでたし……

そう言えば、俺の農場ってどうなってるんだろうか？　それも後で確認しに行こう。

そうそう。ウォールって言うのはお金を示す名前前で、銅貨1枚1ウォール。つまり俺の所持金は銀貨にして50枚って事だ。

時間の経過は基本的に地球と同じ様に設定されてたから、しばらくは暮らしていけそうではあるけど……

その前に、どうやってお金を取り出すかだよな。

「……F3、オープン」

俺がそう呟くと、目の前に大型犬くらいの大きさの箱が現われた。ゲームで良く見る宝箱っぽい見た目で、何かの金属で出来てるっぽい。

ちょっとびっくりしたのはここだけの秘密だ。

F3はアイテムボックスを開くショートカットだったんだけど、本当に箱が出て来るとはね。

さてさて、字面では確認しなかったけど何が入ってるのかなあ、じゃなくて、お金は入ってるのかなあ。

箱を開けて中を見ると、真っ暗ですよ。日の光が入ってるにも関わらずだ。触ってみると特に感触はない。敢えて言うなら空気に触れた感じだろうか。勇気を出して中の手を突っ込むと、何かに触れた。それを取り出して見れば、それはゲーム画面で良く見たウォール硬貨（銅）だった。

「どこぞのなんちゃらポケットみたいだな」

とりあえず作りは理解したし、アイテムボックスからお金が出せ

る事も分かった。持ち物の確認とかは宿でした方が良いでしょう。
ステータス画面を見ると、所持金が4999ウォールに減っていた。

なるほど。あくまでもアイテムボックス内にあるお金がカウントされてるんだな。

「F2、F3クローズ」

ステータス画面とアイテムボックスを閉じ、俺は燕尾荘を目指し
通りの表へと向かった。

第二話 燕尾荘（前書き）

以前の三話分を一話にまとめました。内容に変更はありませんので御安心下さい。

第二話 燕尾荘

「おお！」

生の目で見る景色は、壮大とは言わないまでも確かにゲーム内の景色と一致した。

周辺の景色よりも、やっぱり目を惹くのは天を貫くあの塔の存在だろう。

とは言え、今は塔に目を奪われている場合ではない訳で。

俺は真っ直ぐに燕尾荘へと向かう。普段の生活なら西がどっちかなんて分からないが、ここがウォークルならば方角で悩む必要はない。街の地理は把握しているし、中心にあるバベルの塔から遠ざかれば良いだけのだから。

と言うか、そもそも燕尾荘の看板は通りに出た時点で視界に入っていたんだけどね。

燕尾荘は木製の家屋だ。日本にある一軒家よりは大きいだろうか。家二戸分くらい？

まあ良く分からないけど、泊まるスペースは十分にありそうだ。入り口に立て掛けられた木製の看板には、お一人様一日宿泊銅貨10枚！ 朝食付き！ と書かれている。

文字が日本語なのは、助かると思うか何と言うか……

「失礼しまーす」

気を取り直して、とりあえず中に入ってみる。

「いらっしやい」

そんなテンプレの言葉で出迎えてくれたのは、40歳くらいの恰

幅の良いおばちゃんだ。入って直ぐカウンターがあり、その奥にイスでもあるのか座っている様な態勢に見える。

「泊まりたいんですけど……」

あまり愛想が良いとは言えないおばちゃんの態度に、何となく腰が引けてしまう。

「一泊銅貨10枚だよ」

うん。実に淡々とした口調だ。この人はこう言う人なんだろう。よし割り切った。

「しばらくの間泊まりたいんですけど、長期だと割引されたりします?」

レッツディスカウント! タワーオブバベルでは値切り交渉も存在した。スキルにも値切りってあったしね。俺は持っていないけど。

「長期は一ヶ月単位で受け付けてるよ。一ヶ月の宿泊では銀貨2枚と銅貨50枚。ただしこの場合は朝食なし。でも銀貨3枚で一ヶ月朝食付きだよ」

ゲームと同じならこの世界の一月は必ず30日だ。朝食抜きにすればお得だけど、朝食付きだと特に割引はないのか……

「そこを何とか!」

今後ゲームの時の様に資金稼ぎが出来るとは限らない。少しでも出費は抑えたい所だ。

「そうさね……なら、二ヶ月宿泊を決めてくれるなら、銀貨5枚で朝食付きにしてやっても良いよ」

交渉系のスキルもなしにこの結果なら悪くはないのかな。
所持金の10分の1で、二ヶ月間の寝床と朝食を確保出来るなら上等だろう。

「分かりました。それでよろしくお願いします」

「当然前払いだけど大丈夫かい？」

「はい」

俺はおぼちゃんの言葉に頷き、「F3、オープン」と小さく呟く。
すると目の前にアイテムボックスが現われ、おぼちゃんは驚きの表情を浮かべた。

「見てくれて冒険者なのは分かったけど、あんた空間魔法が使えるのかい？ 若いのに凄いねえ」

ゲームであるタワーオブバベルにおいて、プレイヤーは冒険者と呼ばれていた。ゲーム上の舞台はバベルの塔一つだけだが、プレイヤーは塔の攻略を目指して他の街から訪れたと言う設定があるからだ。

それはそれとして……空間魔法？ アイテムボックスの事を言ってるみたいだけど……

まあ、それを否定する必要はない。俺は「ええ、まあ」と曖昧に頷いておき、中から銀貨5枚が出て来る様に念じて手をつ込む。
手に何か触れた感触を覚え取り出すと、期待通り銀貨5枚が俺の手に握られていた。

ついでにポケットにしまっておいた銅貨をアイテムボックスに戻

しておく。

「これでお願いします」

アイテムボックスをしまい、おばちゃんに銀貨5枚を手渡す。

「はいよ。詳しい説明はあるかい？」

「後でも良いですか？　とりあえず荷物を整理したいので」

俺から銀貨5枚を受け取ったおばちゃんが、ここに来て初めて浮かべた笑顔をまあすっぱり気にせずに俺はそう答えた。

「構わないよ。それじゃあ、これが部屋の鍵ね。2階の一番奥の部屋さ」

「ありがとうございます」

俺はおばちゃんから鍵を受け取り、横目に見えていた階段を上る。そう言えば、入り口も建物の左側にあったし、階段もそうだ。とりあえず2階が宿の部屋なんだろうと判断し、俺は言われた通り一番奥の部屋まで進んだ。

部屋に入った俺は、とりあえず鍵を閉めると再びアイテムボックスを出す。

持っている物を確認する為にスタータス画面を開き、所持品の項目を巡る。

消耗品の類いには回復アイテムがいくつかある程度で、特に珍しい物はない。分かってはいたけどちょっとがっかりだ。

装備品は、メイン装備が壊れてしまった時の為に用意した予備の装備が一式ある。売ればそれなりの値にはなるはずだ。

タワーオブバベルの世界において、装備品は一度手に入れば永久的に使える代物ではない。消耗品の中にも何度か使用出来る物が

あるが、装備品も磨耗していきいつかは壊れる。修理するという手段もあるし、同じ物を揃えると言う手もある。

そう言えば今の装備品ってどうなってるんだろうか？

ステータス画面で確認すると、きちんと装備の欄があった。

武器…エルザナイフ

防具…ガーランドの闇法衣

装飾品1…シリビアンピアス

装飾品2…竜皮の靴

項目はゲーム内の仕様と同じだ。防具は鎧の類いを指し、他の部位に着ける装備は全て装飾品扱いとなる。その装備可能数は通常は二つ。ジョブによってはその数が増えるらしい。

因みに今の俺は靴を装備してるけど、装飾品に靴を装備しなくてもきちんと靴は履いてる事になってる。けど、ゲームとは違う今となってはどうなるんだろうか。

そう言えば、俺のジョブはどうなってるんだ？

今度はジョブの欄を見る。

職業…ジョブ クリエイター創造主【レベル50】

ジョブの最高レベルは50だから、こちらもカンスト状態だ。クリア直前にはジョブレベルは49だったから、これも最後の戦闘で上がった様だ。

クリエイターは非戦闘職と呼ばれる種の職業だが、隠し上級職の一つで、この系統では最高職でもある。

スキルの確認はまたにするとして、当初の目的を果たさないと。所持品のリストを見ながら、アイテムボックスから取り出していく。

「回復アイテムって飲み物タイプだったんだ」

問題は味と効果だ。ステータスにHP等の項目がない以上、具体的な効果を確かめる事が出来ない。

何よりももったいない。

検証は大事だと思うけど……

今はまず生活を安定させる事が大事だ。

一度出したアイテムと腰に提げていたエルザーナイフをアイテムボックスにしまい、そのままアイテムボックスを閉じる。

ステータス画面を見ると武器の欄がなしと表記されている。

「さてさて。確か宿についての詳しい説明があるって言ってたな」

しばらくはここにやっかいになるんだ。諸注意があるなら聞いておかないとまずいだろう。

後で聞くなって言っちゃったしな。

まだまだ確認したい事はあるが、とりあえず腰を落ち着かせられるくらいには自分の中でも整理が出来たと思う。

そう判断して、部屋を出て1階に向かった。

「おや、早かったね」

階段を降りると、最初に出迎えた時とは違い営業スマイル？を浮かべたおばちゃんにそう迎えられた。

「そうですか？ まあ、最低限の整理しかしてませんかね」

「そうかい。ともあれ、この宿について説明するかい？」

「はい。お願いします」

俺がそう答えると、おばちゃんはどこことなく気を良くした調子で

饒舌に説明を始めた。

微妙に話が逸れたりしながら十分くらいかかったその説明によると、宿側は基本的に客の生活には不干涉。客同士のいざこざがあった場合も、宿に迷惑がかからなければ仲裁にも入らない。

朝食に関しては朝10時までにはカウンターで食べる事を伝えなければその日は貰えないとの事。例えば朝食を抜いたとしてもその分の返金はなし。因みに朝食の開始は朝6時。メニューはその日毎に宿側で決めるらしい。

1階にある食堂はレストランにもなっており、代金さえ払えば別途注文する事が出来る。レストランは宿泊客以外にも開放されているが、特に宿泊客にサービスがある訳ではない。

トイレや浴場は各部屋にはなく、1階の共同トイレと共同浴場を利用する他ない。とは言え温泉の様な大きな浴場ではなく、一人一人利用するのが精一杯な一般家庭のお風呂みたいなものだ。トイレも風呂も男女で別に用意はされている。

浴場を利用する際は入り口に用意された使用中の札を扉にかけ、きちんと鍵を閉める事。まあ当然だ。

ついでに言えば1階にはトイレ、浴場、食堂の他におばちゃんやコックをしているおばちゃんの旦那さんの部屋がある。2階の部屋は全て宿部屋で、廊下を挟んで5部屋ずつの計10部屋。最初に感じた宿屋の全体像より大きい建物みたいだ。

今度から目算で物を言うのは控えよう。

「分かったかい？」

「大丈夫だと思います」

後は普通に旅館とかホテルに泊まる時の諸注意みたいなものを言われた。

しばらくは関係ないけど、一応宿のチェックアウトは正午までとなっている。正午を過ぎたら一日分多く代金を請求されると。気を

付けないとな。

そんな風に考えていると、階段から誰かが降りて来る足音が聞こえてきた。

降りて来たのは、一言で言えば美人だった。

二言で言えば、綺麗で美人だった。

腰近くまで伸ばした金色の髪は毛先まで手入れされている（だろうと思う）。

目元はややキツイ感じがするが、キリッとしたその顔付きは端正な顔立ちを強調している。

動き易さに重点を置いたであろう金属製の軽鎧を身に纏い、腰には一本の長剣を差している。見た目は完全に剣士職だが、詳細は判断出来ない。

良く見れば瞳の色が藍色だ。珍しいと言うか、流石はファンタジー世界と言った所か。

「ライムちゃん、もう出かけるのかい？」

「はい。今日は少し上まで行ってみようと思ひまして」

おばちゃんにライムと呼ばれた美人さんが、堅苦しい口調でそう答えた。

今の会話から察するに、ライムちゃんはこれから塔に向かうのだろう。

「気を付けるんだよ」

「はい。ありがとうございます」

おばちゃんの意外と？ 気さくな言葉に、ライムちゃんは几帳面にお礼を言ったかと思うと、またまた几帳面にも「行ってきます」と行って宿を出て行った。

俺の方には見向きもしなかったのはちょっと哀しいものがあるが、

まあ仕方ないだろう。

と言うか、思ったより客に対して不干渉じゃない気がしないでもない。別に良いんだけどね。

「今のは？」

「個人情報教えられるないよ」

「そりゃあそうでしょうけど。さっき名前呼んでましたよ」

「……名前くらい問題ないさ」

割と適当な感じなのね。

「そう言えば、宿帳に記名とかしなくて良いんですか？」

「そう言う宿もあるけど、うちでは必要ないよ。そんなにたくさん客がいる訳じゃないしね。ワタシが顔を覚えていれば良いだけさ」

他に従業員はいないのだろうか？ まあ、細かい事は気にしないで良いか。

「そう言えばついでにもう一つ。さっきの説明で門限の話が出なかったんですけど、出入りは常に自由なんですか？」

「そうさね。宿の出入り口には鍵もないし、基本的に出入りは自由だよ。勿論、ある程度常識の範囲で行動はして貰いたいけどね」

なるほど。塔を攻略中、いつ失敗して外に飛ばされるか分からない以上ある程度は融通を利かせてくれる様だ。

「分かりました。気を付けます」

「そうしておくれ」

と、お互い苦笑を浮かべる。

あれ？　そう言えばさっきも（・）う（・）出かけるとか言ってたな。

「今って何時なんですか？」

「まだ9時前だよ。そこに時計があるだろう」

おばちゃんがそう言いながらカウンターの壁、ちょっと上の方を指差した。

確かに、アナログな壁時計が掛けられている。

8時40分か……

あ。そう言えばステータス画面に時計機能があったよな。そう思い出し、ステータス画面を開く。

右下の方にきちんと時計が付いてる。こっちはデジタルだ。

8時40分35秒。って見てる間に秒数は経過していくけど。

まあ、これなら時間に困る事はない。

待てよ。そう言えば今日はいつなんだ？　俺がゲームをしていたのは冬だが、ゲーム内では確か春だった気がする。

「今日って何日でしたっけ？」

「もうボケが始まってるのがかい？」

なんて笑って言うおばちゃん。冗談の様だ。これで月まで聞いたら本当にボケてると思われるそうだ。いや、でもおばちゃんの冗談を利用すれば聞けそうだな。

「そうなんですよ。実は今が何月何日か分からなくて……教えて下さい」

と、冗談っぽく言う。

おばちゃんは一瞬驚いた様な表情を浮かべたが、直ぐに俺の悪ノ

りだと思ったらしくきちんと答えてくれる。流されなくて良かった。

「しょうがないねえ。今は初桜はつぎんぐいの月の10日だよ」

初桜の月か。やっぱりゲームをプレイしてた状況とほぼ一緒みたいだ。

因みに、タワーオブバベルの世界にも四季はあった。月でしっかりと分けられていたけど、流石に今は多少のズレがあるかもしれない。

初桜の月は春の一月目。次が桜花おうかの月、内桜うちぎくの月、桜終おうつひの月と春が続く。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。それで、あんたはこれからどうするんだい？」

「少しこの辺りを見て回ります。この辺には詳しくないので」

嘘だけだ。

「そうかい。気を付けるんだよ」

「はい」

気を付ける事なんてあるのか？ まあいいや。

「それじゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

おばちゃんに見送られて、俺は燕尾莊を後にした。

第三話 野菜農家の悩み（前書き）

以前話を纏めました。以前話と話の間を繋ぐために会話を差込みましたが、基本的には変更点はありません。

第三話 野菜農家の悩み

ゲームのタワーオブバベルにおいて、最も簡単にお金を稼ぐ方法は塔に入る事だ。

各階に設定された乱数に基づいて、定期的に宝箱が出現するってのもあるし、何よりもモンスターを倒せばそれだけでお金が手に入るからだ。狩りゲーとは違うのだよ。

とまあそれは良いとして。

それが簡単な方法と言うだけで、他にもお金を稼ぐ方法はある。と言うか、塔を攻略する以外のプレイスタイルとして色々なシステムがあると云った方が正しいかもしれない。

と言ってもその殆どが商売関連だ。専用のスキルが必要になる事が多く、生産に重きを置いて商品を卸したり、逆に生産スキルを持つ者から商品を買って販売を行ったりする者が多かった。勿論その両方を行なう者もいた。

そして、俺が塔攻略の他に唯一手を着けていたシステムが農場運営。

その農場システムの有無を――と言うより、俺が資金を注ぎ込んだ農場の存在を確かめるべく、それがあるはずの場所へと向かったが。

目的地に辿り着いた俺は絶望する他なかった。

「新地かよ……」

いや待て。もしかしたらちょっと違う所にあるかもしれない。見渡せば畑とかはちゃんとあるし、この場所は農村街だ。

「すいませーん」

俺は近くを歩いていたら男の人に声をかけた。

クロウ農場（安易なネーミングでスマセンね）があるかどうかを聞いたが、知らないと言われた。その後何人かに聞いてみたが、やはり知らないと言う。

農場について特に関心がないだけかとも思ったけど、どうやらそう言う訳ではないらしい。

そもそも、農場の前にはきちんと看板が立てられている。

「一からやり直しか……？ いや、いつその事農場から手を引くべきか……」

だとすると、燕尾荘に泊まっているのは不便だ。とは言え、二ヶ月は宿泊が決まっている。

まあ、新しく農場を始めるとなるとそれなりに資金が必要になる訳だしな。二ヶ月の間に資金を増やしながらこの先どうするか考えるとするか。

「あろう」

一応、農場以外の事を始める事も視野に入れておくでしょう。

「すみません」

他にどんなシステムがあったかなあ……

「ちょっと良いですか？」

道具屋とかあったな。と言うか商売系か。他には……

「すみません！」

「うわ！ え？ あ、はい？」

後ろの方で小さくなんか聞こえると思ってたけど、急に大きな声がしてびっくりした。

振り返ると、そこには女の子が一人立っていた。

はつきり言って小さい。しかし出る所がこれでもかってくらい出てる。

これは童顔なんちゃらと言う娘っ子ではないか！ 顔も可愛らし
いし、早熟な子供じゃなければ直ぐにでも手を出したいくらいだ。

……あれ？ 俺ってこんなナンパなキャラだったっけ？

少なくとも、日本にいた頃はナンパなんてした事ないし、どちら
かと言えば女の子は苦手だったはずだけど……

まあいいか。

「農場に、興味があるんですか？」

聞こえない事はないくらいの小さな声で、目の前の少女はそう聞
いてきた。

「何で？」

「農場、探してるみたいだったから……」

弱々しい声音で答える少女。何か俺がいじめてるみたいに思えて
きた。

いやいや。そんな訳ないし。

「あると言えばあるかな」

状況によっては諦める事も考えていたとは言え、何となく性に合
つてるとは思っている。

「もし良かったら、ウチの農場を助けて貰えませんか？」
「は？」

今までで一番はつきりとした口調で、その少女の口から信じられない言葉が出て来た。

「詳しい話、聞かせてくれる？」

俺のそんな言葉に、少女はしっかりと首を縦に振った。

「ここじゃ何ですから、うちに来て下さい」

「良いの？」

「はい」

少女の厚意？ を受ける事にして、詳しい話は少女の家で聞く事にした。その道すがらお互いに自己紹介を終え、少女の名前がミルクだと分かった。

そう言えば、女の子は食べ物とか系の名前の方が多かったなと思
い出す。

案内されたのは農村街では珍しくない木製の一軒家。とは言っても小さめの家で、一階建てだ。しかし奥には畑が見える。

「誰もいないみたいだね」

迎えられるままに家の中に入ると、中からは人の気配がしなかった。

「……はい」

と頷く様子は、本当に子供みたいに見える。まあ、どちらにせよ年下である事には変わりはないんだけどさ。

いやいやそう言う事じゃなく。頷くミルクちゃんの様子はやけにしんみりとしたものだった。これは地雷踏んだか？

「父さんは、今中心街に行ってるから」

母さんは……とは続かない。やっぱり地雷だったみたいだ。

これ以上こっちから振るのは止めておこう。

「それで、助けて欲しいって話だけど？」

リビングと思しき部屋へ通され、促されるままにイスに座った俺は、早速本題に入る事にした。

「はい。ウチは野菜を作っているんですけど、ある日それが全然売れなくなって……」

まあ、当然暗い話だねー。

「味も品質も落としてなんていないのに……それで、父さんが色々調べたんです。そしたら、中心街ですごく安く野菜が売られて……」

「そのせいで売れなくなったと。その安い野菜の味とかはどうなの？」

そこ大事よ。

「不味くはなかったです。でも、ウチの野菜の方が絶対に美味しいです」

ちよっただけ熱く語るミルクちゃん。よっぽど自分の所の野菜に自信があるのか、ただの愛着か……

「それって、最近の話？」

「はい。先月の頭から売れなくなって、一週間くらいでおかしいな
って思い始めたんです」

「それで調べてみた訳だ」

「はい」

なるほどね。まあ、どこの世界でも基本的に安い物は人気がある
って訳だ。

「それで、お父さんは今日も原因を調べに行ってるのかい？」

「えっと、そうじゃないんです」

「どう言う事？」

「今は市場の人と揉めてる状況なんです。出来る限り今までの値段
で買い取って貰える様に、交渉に行ってるんです」

「それで今日も交渉って訳だ」

「はい」

市場側にしただって、利益を出せないんじゃないじゃあ意味がない訳で……
そうそう上手く行くとは思えないな。

「それで、具体的に俺に何をして欲しいのかな？」

それを聞かない事には、ミルクちゃんの事情を聞いた所でどうし
ようもない。

「父さんを手伝って欲しいんです。父さん、野菜作りしか興味のな

い人だから、中心街の人と交渉なんて上手く行くはずないんです」

何だ。ミルクちゃんも意外と現実を理解してるじゃないか。

「可愛い子の頼みだし、手伝ってあげても良いけど……」

俺の可愛い発言に、ミルクちゃんは頬を紅く染める。初々しいねえ。

「俺は善人って訳じゃないから、報酬は貰うよ？ 労働には対価を。これ世の中の基本だからね」

「分かって、ます」

まあ、商売をしてる家の娘だ。それくらい理解はしてるだろう。

「それで、俺は何を貰えるのかな？」

「畑の一部を、無料で貸します」

なるほど。それで興味があるか聞いたのか。

「お父さんの許可、貰ってないよね？」

「大丈夫です。わたしが、自分で買った土地があるんです」

ほー。まだ若いのに大したもんだ。って、これじゃあ俺が年寄りみたいだな……

「小さいですけど、一応畑をやるうと思って買った土地なので……」
「分かった」

語尾が小さくなったミルクちゃんの言葉に繋ぎ、俺ははっきりと

そう答えた。

「報酬はそれで良いよ」

普通なら失敗したとしても何らかの補償はして貰うものだが、それを口に出すのは野暮ってmondarou。

「ただ、俺は俺で動かさせて貰うよ」

「え？」

「君のお父さんと一緒には行動しない。多分、その方が上手く行くと思うし」

俺の言葉が信じられなかったのか、きよとんとしているミルクちゃんにそう告げる。

少し考えた様子だったミルクちゃんだったが、納得したのかしつかりと頷いた。

「分かりました。方法はお任せします」

「よし。それじゃあ契約成立だ。悪いけど、行動に移すのは明日からで良いかな？」

「はい。でも、出来るだけ速くお願いします」

「分かってるよ」

ミルクちゃんからすれば生活がかかってるもんな。

「それじゃあ、良い結果を期待してて」

「はい！　ありがとうございます！」

嬉しそうに頷き、ミルクちゃんは深々と頭を下げた。

俺は「じゃあね」とだけ言葉を残し、ミルクちゃんの家を後にし

た。

さてさて。これが初クエストと言う事になるのかな。

クエストとは、冒険者が依頼を受けて報酬を貰う為のシステムだ。内容を考えれば交渉系のクエストだろう。けど、どうにもきな臭い。荒事になりそうな予感がする。となると、今の俺がどの程度戦えるのか知っておく必要がある。

レベルは高いが、ステータスは不明。装備はしっかりとあるものの、それを使いこなせるかどうかは別問題。

今更だけと言っておくと、身体は間違いなく俺——水原 悠人の物だ。自慢じゃないが運動は決して得意ではない。苦手でもないけど。

いざって時の為にスキルの確認も踏まえて、身体を動かせる場所があると良いんだけど……

どこか良い所はないかなー。と考えながら歩いていると、前から見覚えのある人物が歩いてきた。

「あ」

と声を上げたのは相手の方だ。どうやら向こうも気が付いたらしい。

トタトタと小走りで俺に近寄って来たのは、今朝方俺を介抱してくれたモナカだ。

「クロウさん……でしたよね？ 燕尾荘の場所、分かりました？」

「ああ。表に出たら直ぐに見えたしね。でも、ありがとう。助かったよ」

「どういたしまして」

俺の言葉に、笑顔を浮かべるモナカ。
うん。和む。

「それで、こんな所でどうしたの？」

自分の事は棚に上げて、特に何をしている訳でもなさそうなモナカにそう尋ねた。するとモナカは苦笑を浮かべ、ゆっくりと口を開く。

「うち、農場を経営してるんです。でも、最近ちょっと上手くいってなくて……」

はいイベント来た！

と言うか、そんな事簡単に他人に教えても良いのかね。しかも会って間もない様な相手に。と思わないでもない。

「もしかして、野菜が売れなくなってるのかそう言う話？」

「何か知ってるんですか!？」

俺の言葉に、モナカは異様なまでに食いついてきた。
どうやら、モナカの家も野菜関係の農家みたいだな。

「知ってるって言う程じゃないよ。ただ、さっき他の農場から依頼を受けてね」

と、ここは正直に話しておく。だって、モナカの様子がちょっと怖いんだもの。いや、見た目は相変わらず可愛いけどさ。

「そうですか……やっぱり、どこも打撃を受けてるんですね。でも、依頼を受けたった言う事はもしかして……」

モナカがそう言いながら、期待を込めた視線を向けてきた。

「一応、解決に向けて動くつもりではいるよ。どこまで出来るかは分からないけど」

「そうなんですか……でも、ありがとうございます！」

「まだお礼を言われる様な事はしてないよ。出来るとも限らないし」「いいえ。例え結果が出なかったとしても、私達農家の為に動いてくれたって言う事が、私達にとってはありがたい事ですから」

真摯な表情で、モナカはそんな風に語る。

まあ、可愛い子に良く思われるのは悪い気がしない。

「そう？ まあ、全力は尽くすよ」

「お願いします」

そう言って頭を下げるモナカ。彼女に依頼された訳でもないのに

……

よっぽど困ってるんだろうな。

「ところでさ、この辺に身体を動かせる場所ってないかな？ 出来ればあんまり目立ちたくないんだけど」

「それなら、うちの畑なんかどうですか？」

「え？ 良いの？」

「はい。収穫後で今は何も植えてない畑がありますから」

「それはありがたいけど、もしかしたら結構荒れるかもしれないよ？」

「大丈夫ですよ。新しく種植える時は一度均しますから」

「そっか。なら、ちょっと場所を借りようかな」

「はい。うちはこっちです」

モナカのそんな厚意で、俺は案内されるままにモナカの家に向かう事になった。

能力確認

結論から言おう。モナカの家には寄らなかった。

と言うか、使っても良いって畑は家から少しだけ離れた所にあった訳だ。

と言っても目と鼻の先だけど。

モナカの家はミルクちゃんよりも規模が大きい農場らしく、案内された畑もそれなりに広いし、同じ規模の畑が後二つあるそうだし、それはさておき。

まずは軽く身体を動かしてみる。

柔軟をしてから、畑をぐるっと一周走る。二周目は少しペースを上げる。三周目は緩急をつける。

三周走り終えた所で一度足を止める。

本来の俺なら、もう息が上がってて当然の運動をした。にも関わらず、今の俺はまだまだ元気だ。

数値化されていないだけで、ゲームのステータスが反映されているのかもしれない。

体方面はこれで問題ない事が分かった。次は武器を使えるかどうかかな。

「F4」

俺がそう言葉を発すると、俺の身体が光の粒子に包まれた。それは一瞬の事で、光が止むと俺の手には一振りのナイフが握られていた。

F4はメイン武器と予備武器の入れ替えコマンド。装備の変更は戦闘中に行なう事もある為、単語のみで起動する様にしてある。

「F5、F6」

続いて防具と装飾品も変更してみる。

武器の時と同じ様に身体が光の粒子に包まれ、それが明けると装備が変わっていた。

一応ステータス画面を開いて確認してみる。

武器…雷神の短刀

防具…暴風竜の法衣

装飾品1…神秘の勾玉

装飾品2…竜皮の靴

よしよし。問題なく装備は交換されている。

F5が防具の交換。F6が装飾品1の交換だ。装飾品のショートカット交換は1しか登録出来ない仕様な為、他は手作業で変えるしか手はない。

さてさて。じゃあナイフを振ってみるかな。

と、適当に素振りをする。

「何となく手に馴染む感じはあるかなあ」

ナイフを振る事に違和感がない。振れば振るほど、ナイフを使いこなせる気がしてくる。

斧とか重い武器って訳でもないから、それなりに使えてもおかしくはない。けど、それ以上に今まで何度も振るってきたかの様な感覚がある。

「大丈夫だと思っておこう」

と自分に言い聞かせる。

次はスキルだ。それなりに数があるから、いくつか確認しておけ

ば他のも使えるだろう。

「ストーンウォール」

俺がスキル名を声に発すると、俺が思い描いた通り目の前に石の壁が現われた。

強度はどんなものかと、ナイフで斬りかかる。

雷神の短刀は魔力を秘めた逸品だが、石の壁を僅かに削る程度しか出来なかった。刀身に傷が入らなかったのは流石と言うべきか……

「エレメントシュート」

石の壁から少し離れて、今度は攻撃用のスキルを発動する。

前に突き出した俺の手から放たれた七色の光を放つ球状の物体。

タワーオブバベルの世界において存在する七つの属性全てを混ぜ合わせた弾丸を放つそのスキルが衝突し、石の壁は被弾部分が粉々に砕け散った。

「基本的にエフェクトはゲーム内と同じみたいだな」

それにきちんとスキルも発動する。これなら、大概の荒事にも対応出来そうだ。

「後は、支援系のスキルも試しておくかな」

こうして、しばらくスキルの確認に時間を費やす事になった……

天地創造

クリエイターが覚えるスキルは、実を言えば一つしかない。

そのスキル名は天地創造。タワーオブバベルの世界では、ジョブ毎に使用出来るスキルが決まっており、ジョブを変えれば一度覚えたスキルでも使用不可になる事も多々ある。それでもまた元のジョブに戻れば使える様になる為、ジョブチェンジをマイナスと捉えるプレイヤーは皆無と言っても過言ではなかった。

とは言え、上級職の方がより優れた恩恵を受けられる為、例えば便利なスキルが使えなくなるとしても上級職を目指す者は多かった。しかしだ。俺の現在のジョブであるクリエイターは、言ってしまうと最低人気のジョブだ。流石に初期状態と比べれば上だが、少なくとも最上級職としては最低人気。上級職と言われるジョブの中でも最低人気だった。

ジョブ条件を解放しているプレイヤーは数多くいたが、クリエイターのレベルを上げているプレイヤーは、俺の他には二人しか見た事がない。それ程の不人気。

それには当然理由がある。

まず第一に、ステータスへの恩恵が皆無と言う点。マイナス補正も一切ないが、プラスの補正も一切ない。最上級職ともなれば、かなりのステータス上昇が見込めるのが普通だ。しかし、それが無い。第二に、使用可能スキルが専用スキルである天地創造のみと言う点。しかもこのスキルが超がいくつも付く様な特殊スキルだ。

スキル天地創造。それは、自分が今までに覚えたスキルを合成し、新たなスキルを生み出すスキル。当然、データ上存在する範囲でしかスキルを作成する事は出来ないが、他のジョブでは覚える事の出来ない特殊なスキルを生み出す事が可能だ。

この天地創造で生み出したスキルは、天地創造を使用した形式と見なし使用する事が出来る。

が。問題はクリエイターのジョブ解放条件だ。上級職である召喚サモ師と、錬金術師アルケミストのレベルをマックスまで上げる事。それがジョブ解放条件。これだけでもかなりの労力を必要とする訳だが、最低条件を満たした程度ではクリエイターの真価は発揮出来ない。なぜなら条件であるどちらかのジョブのままの方が強いからだ。

クリエイターの真価。それは天地創造の条件だ。今までに覚えたスキルを合成する――つまり、多くのジョブを極めれば極める程その幅が広がっていく事になる。

因みにだ。タワーオブバベルにジョブは全部で108個あると言われている。条件の分かっている隠しジョブもまだ存在していて、現在確認されているのは90個。類似職等で重複するスキルがあるとは言え、その全てを覚えようとすれば異様な程に時間と労力が必要になる。

それなら、一系統のジョブを極めていった方が余程楽と言う話だ。それでも俺はクリエイターとして強くなる事を選んだ。だって、天地創造で生み出したスキルには、そのプレイヤーが名前を付ける事が出来るんだぜ。何て素晴らしい！

結局、殆ど安直な名前しか付けてないけど……
自分が名前でどんなスキルが判断出来ないという意味ないしね。

「ありがとう。助かったよ」

一度モナカの家に顔を出して、玄関先で俺は頭を下げた。

「いえいえ。力になれて良かったです」

そう答えて笑顔を浮かべるモナカ。

うん。癒される。

「もしかしたらまた場所を借りに来るかもしれないけど、その時は

よろしく」

「種植え前だったら良いですよ」

と、今度は苦笑を浮かべる。

「うん。それじゃあね」

「はい。さようなら」

笑顔で手を振るモナカに見送られながら、俺は燕尾荘へと向かった。

1日目の終わり

燕尾荘に着く頃には、既に日が沈み始めていた。

日没早くね？　と思わないでもないが、何だかんだでスキル確認には結構時間食ったからなあ。

そう言えば昼飯食べてないな。食堂でなんか食べるか……

なんて考えながら燕尾荘の扉を開くと、カウンター越しにおばちゃんと話をしている見目麗しい女性の姿が！

って、あれは確か今朝すれ違った……

「ライムちゃん！」

あ。しまった……

思わず思い出した嬉しさで大声で呼んじやったよ……

名前を呼ばれたライムちゃんが、訝しげな視線をこちらに向けてきた。そりゃあそうだよなー。

「誰だ貴様？　何故私の名を知っている？」

視線だけで人が殺せるなら、おそらく俺は既に殺されているだろう。ってくらい冷たくも厳しい視線を向けながらそんな言葉を放つライムちゃん。

って言うか、おばちゃんがライムちゃんって呼んでたからそのまま定着する所だった。そうだな……

「失礼。ライム嬢。俺はクロウ。今朝ここですれ違ったんだけど覚えてない？」

一瞬だけキリッと表情を引き締める俺。でも直ぐに素に戻る。

ライム嬢は少しだけ考えた素振りを見せ、どうやら直ぐに思い出した様だ。

「誰かがいたのは覚えているが、顔までは覚えていないな」

「ライムちゃん。坊やが言ってるのは本当だよ」

あれー？ 俺いつから坊や呼ばわりされてるんだろう？ まあいいけどさ。

「この子も客さ。出来る限り仲良くしてやんな」

「興味ないな。とりあえず、今後は気安く名を呼ばないで貰おうか」

おう。超クール！ でもそんな所も凛々しくて可愛いぜ！

「俺は仲良くしたいと思ってるんだけどな」

「……失礼する」

もうこれ以上何も言う事はないと言わんばかりに、ライム嬢は階段を上って行ってしまった。

あーあ、残念。

「振られたみたいだね」

と、おばちゃんがどこか嬉しそうに声をかけてきた。

「まあ、少しずつ仲良くなっていきますよ」

「なかなか根性があるみたいだね。まあ、あの子も長くここに泊まる予定だから、精々頑張りな」

「ははは——ありがとうございます」

思わず乾いた笑いをしてしまった。

「それはそうと、食堂開いてますよね？」

「当然開いてるよ。夜は22時までやってるよ」

そうだったのか。覚えておこう。

「ありがとうございます」

「うちで食べてくれるんなら、こっちとしてはありがたいからね。たんとお食べよ」

「頑張ります」

苦笑を浮かべながらそう答えて、俺は食堂へと入った。

燕尾荘の食堂は食券を先に買うタイプらしい。

肉が食べたい年頃な俺は、牛ステーキ定食4ウォールを頼む事にした。

番号札を渡され、呼ばれたら自分で取りに行く形式だった。

牛ステーキ定食はボリュームも味も満足出来る内容で、一泊朝食付きの半分に近い値だが納得出来た。これなら明日の朝食も期待出来るそうだ。

食器も返却口に自分で持って行かなければならなかったが、それくらいは全く問題ない。

ごちそうさま。と声をかけ、俺は食堂を後にした。

カウンター越しにおばちゃんと挨拶を交わして自分の部屋へ戻る。

今日は色々あった。いや、マジで。

今更ながらどっと疲労感が襲って来た。

汚れた身体は備え付けのタオルで拭くくらいに留めて、またまた備え付けの寝巻きに着替えた俺はそのままベッドに倒れ込んだ。

シャワーは明日の朝浴びる事にしよう。

そう決めた次の瞬間には、大きな睡魔が襲ってきた。

「夢オチとか、ちょっと期待しておこうかな……」

そんな眩きを漏らし、俺はそのまま眠りに着いた……

今後の方針

目を覚ますと、見慣れない天井が目に入ってきた。

なんてテンプレのセリフを思い浮かべて、自分の置かれた状況を思い出す。

「……はぁ……」

思わず深く溜息を吐いた。

普通なら考えられない出来事に直面している現状を改めて認識し、気分が滅入る。憂鬱な気分になっているのは確かだけど、不思議と取り乱す程の不安感は覚えていない。

女の子への対応なんかも考えると、まるで思考の一部が変革してしまったかの様だ。

身体を起こして、身支度を整えながら今後の事を考える。

帰りたい――

不思議とそんな欲求も湧いてこない。とは言え、このままここで生活していけるのかも分からない。家族や友人の事を考えれば、帰れるなら帰った方が良いに決まってる。ならその為の方法は……？ 考えられるのは、もう一度塔を攻略する事だ。この世界にある塔の最上階にも神がいるというのなら、元の世界へ帰らせてくれるかもしれない。手がかりがそれしかない以上、塔の攻略を志すべきだろう。

とは言え、現状で攻略出来る確率は低そうだ。となると、やっぱり生活の基盤を整えた上で装備やアイテムを揃える必要がある。

依頼として受けた事だし、まずはミルクちゃんからの依頼をこなす事を考えよう。

当面の方向性が決まる頃には一通りの身支度が整え終わり、部屋を出て1階に降りる。

「おはよう」

「おはようございます」

おばちゃんに声をかけられ、俺は素直に挨拶を返した。

「朝ご飯、食べるかい？」

「はい」

最初は無愛想な人だと思ったが、客になった瞬間から随分愛想が良くなったよな。と改めて思う。

「はいよ」

俺が頷くと、おばちゃんがカウンターの下からプラスチックっぽい赤い札を取り出してカウンターに置いた。

「食券の代わりですか？」

そう言いながら札を手取る。

「そうだよ」

「分かりました。因みに、今日のメニューはなんですか？」

「焼き鮭定食だよ」

これはまたオーソドックスなメニューだな。全く問題ないけどね！

「そう言えば、今お風呂って空いてます？」

「空いてるはずだよ」

「分かりました。じゃあ、先にお風呂に行つて来ます」

「構わないけど、札は失くさない様にね」

「気を付けます」

おぼちゃんの言葉に苦笑で返し、俺は浴場へと向かった。

浴場と称しているだけあって、思ったよりは広かった。二人くらいなら入れるんじゃないか？

まあそれはそれとして。朝食も待ってる事だし、元から長々と風呂に浸かるタイプじゃない。さくつとシャワーだけ浴びて風呂出る。

続いて食堂へ向かい、赤い札を渡す。

少し待たされ、聞いていた通り焼き鮭がメインの定食を受け取った。

ファミレスとかの朝の膳みたいな感じだけど、味はそれ以上だ。

燕尾荘の食堂、侮れないな！

「あ、そうだ」

メニューに野菜が入っていた事で、市場調査の一環を思い付いた。食べ終えてトレーを返却口に出すついでに、厨房にいる人間に声をかける。

「すいませーん」

「何か？」

声を返してきたのは、まだ若いあんちゃんだった。

宿はおぼちゃん一人で切り盛りしてるみたいだけど、流石にレストランとなるとオヤジさん一人ではない。それは昨晚に分かったけどさ。

「仕入れについて聞きたい事があるんですけど」

「そういった事には答えられませんよ」

まあそれもそうか。だけどまだ諦めるには早い。

「野菜の仕入れ先だけでも教えて貰えませんか？ 農業に興味があるんです」

「うーん……オヤっさん、野菜の仕入れ先が知りたいって言うんですけど、教えても大丈夫ですか？」

喰らい着く俺がそう簡単には諦めないと思ったのか、あんちゃん
は奥にいるオヤジさんにそんな質問を投げかけた。

「駄目だ」

「ですよねー。と言う訳で、やっぱり教えられません」

俺は負けない！

「分かりました。じゃあこれだけ教えて下さい」

分かったと言う俺の言葉に、一瞬安堵の表情を浮かべたあんちゃん
だったが、そうは問屋が卸さないぜ。

「どこかの農家から直接仕入れてますか？」

これが大事だ。もしそうなら、燕尾荘は今回の件とはまず関係ない
だろう。そうじゃないなら、もっと色々探らないといけないかもしれない。
しれない。

「まあ、それくらいなら……そうですね。農村街一の味と品質を誇る
農家から直接仕入れてます」

そこまで言ったら、場所も特定出来るんじゃない？　と思わないでもないが、情報をくれたあんちゃんには心の中で感謝しておこう。

「そうですか。ありがとうございます」

外面的にもきちんと礼を言い、ご馳走様でしたと言う言葉と共に食堂を後にした。

最初の一步

食堂を後にした俺は、おばちゃんに一言出かける旨を伝えて燕尾荘を出た。

この時点で時刻は朝の9時だ。寝た時間が早かった割には起きたのは遅い。何だかんだで疲れてたんだろう。

とりあえずは確認したい事があるから、ミルクちゃんの家に向かう事にする。

道は覚えてるし、大した距離でもない為直ぐに目的地に着いた。玄関の扉をノックすると、中からミルクちゃんが顔を出した。

「クロウさん。おはようございます」

「おはよう」

俺の顔を見て少しだけ驚いた顔を浮かべたミルクちゃんだったが、直ぐに笑顔で挨拶をしてきた。勿論俺も笑顔で返事をしたさ。

「どうかしたんですか？」

「ちよっと聞きたい事があってね」

ミルクちゃんが把握してれば良いんだけど……

「お父さん、まだいる？」

「すみません。もう中心街に向かいました」

「いや、良いんだ。どっちゃかって言うミルクちゃんから話を聞きたいし。知ってればだけどね」

「分かりました。わたしが分かる事でしたら何でもお答えします」

「OK。えっと、上がっても良いかな？」

俺は別にここで話しても良いんだけどね。一応込み入った話をする訳だし。

「あつ。えっと、すみません。どうぞ」

慌てた様子でそう答えて、俺を家の中へと促すミルクちゃん。しっかり者の様に見えて意外とドジッ娘か！

「お邪魔します」

昨日も入ったりリビングに通され、俺は昨日と同じ木製のイスに座った。

「今お茶淹れますね」

「お構いなく」

礼儀としてそう答えたものの、実は水分を欲していたりする。まあなくても平気だけどね。

ミルクちゃんはそれでもお茶を用意してくれた。あ、ちゃんと昨日も貰ったぞ。ミルクちゃんの名誉の為に言っておく！

ミルクちゃんが用意してくれた冷たいお茶を一口飲み、俺は早速本題に入る。

「ミルクちゃんとは、近隣に直接野菜を販売したりしてる？」

「いいえ。うちはそんなに大きくないですから、生産量的に全部市場に卸してます」

「昨日聞きそびれたんだけど、売れなくなっただけなのは市場から？それとも、市場が買い取ってくれなくなった？」

「最初は、単純に市場での売れ行きが落ちたんです。だから、市場側も最初はうちに安く売る様に言ってきたらしいです」

「それで、お父さんは市場の人と揉めてる状況な訳だ」
「はい。わたしが聞いている限りはそうです」

実際にはまだ、根本的な原因となる相手が分かってないのか……

「こんな事聞くべきじゃないかもしれないけど、この辺りで一番の農家って言ったらどこかな？」

「そうですね……うちが一番って言いたいですけど、やっぱりバトンさんの所でしょうか」

バトン――

その名前を聞いて、俺は昨日のある風景を思い出した。

バトン野菜農場。そんな立て札が立てられた畑の中で、俺はスキルの確認をしていた。

モナカの所か……

「それじゃあ最後の質問。ミルクちゃんところが契約してる市場って、どこ？」

一言に市場と言っても、中心街にはいくつか市場が存在している。

「桜市場です」

桜市場ね。農作物を取り扱う市場の中では一番の大手だ。

「分かった。ありがとう」

「いいえ。クロウさんの役に立てたなら嬉しいです」

そう言うてはにかむミルクちゃん。多分問題解決に役立つからって意味なんだろうけど……

俺勘違いしちゃうよ！

「それじゃあ、そろそろ行くよ」

「はい。頑張って下さいねっ」

「おう！」

ミルクちゃんに見送られ、俺は次の目的地——バトン家へと向かった。

聞き込み調査

「あれ？ クロウさん……どうかしたんですか？」

モナカの家へと着いた俺は、早速扉をノックした。すると出てきたのはモナカで、何となくミルクちゃんと似た様な反応を返された。

「ちょっと聞きたい事があってね。バトンさんはいるかな？」

「父は仕事で中心街に行ってますけど……もしかして、例の件についてですか？」

「まあね」

「私で分かる事ならお答えしますよ？」

俺が農家の皆さんの為に動いてると知っているからか、モナカはとても協力的な発言をしてくれた。

うん。マジ助かる。

「それじゃあ……まず確認しておきたい事があるんだ。モナカの所は、市場に卸してる？」

「はい。市場にも卸してますし、個人的にお付き合いのあるお店なんかには直接販売もしてますよ」

「燕尾荘の食堂にも？」

「一応、そこまではお答え出来ないんですけど……確信、持ってますよね？」

俺の聞き方からそんな風に受け取ったらしい。確信と言う程ではないけど、状況的にそうかなとは思ってる。

「まあね」

「でしたら、否定はしません」

でも肯定もしないと。まあ構わないけどさ。

「そっか。それじゃあもう一つ。卸してる市場って、桜市場？」

「はい。それと梅市場、菊市場にも卸してます」

それはあれだ。野菜類を扱ってる市場には全部卸してるって事じゃないか。

やるな……

「全部の市場で打撃を受けてるのかな？」

「そうですね。やっぱり市場同士でも影響は出てますからね。でも、一番は桜市場ですね」

「なるほどね」

と言う事は、現状直接相手が介入してるのは桜市場だけなのかな？
細かい事は市場で聞き込まないと分からないかな……

「ありがとう。参考になったよ」

「もう良いんですか？」

「ああ。とりあえずはね。もしまた何か聞きたい事があったら、その時にまた来るよ」

「分かりました。頑張っして下さいね」

「おう！」

と、ついさっきと同じ様な感じでモナカとも別れ、今度は中心街を目指す。

一番近い市場は梅市場だったかな？ とりあえず覗いてみても良いけど……

先に桜市場に行くべきか、他の市場を見るべきか……

よし！ 決めた！

早期解決をモットーに！ 先に桜市場に向かおう。

そう意を決し、中心街の南寄りにある桜市場へと向かう事にした。

桜市場

燕通りを真っ直ぐと歩き、中心街へと向かう。

中心街に入ったと判断するのは簡単で、直線である燕通りと弧を描く道とがぶつかればそこから先が中心街と呼ばれる区画だ。

輪狐通りと呼ばれるその通りは、塔を囲う様に円を描いている道だ。

俺は輪狐通りに入り街の南側を目指す。しばらく歩けば街の南側を縦断するメイン通り、飛獅子通りへと到着する。

そこから中心街へ入れば、直ぐ左手に桜市場と呼ばれる市場がある。

桜市場は全市場の中で規模は真ん中くらいだけど、その全てが食物類を扱っている市場で、食物類だけで言えば一番の規模を誇っている。

「市場って、結構迷い易いんだよねー」

広さと言うよりは、その混雑具合で。人の多さって意味は勿論、所狭しと店を出していたりするから目的の店を探すのはかなり大変だったりする。

確か野菜の販売スペースは西側だった気がする。何となく行ったり来たりしてる気分になる。

野菜の販売スペースには直ぐに辿り着いた。このスペースは個人での販売スペースじゃなくて、会社やギルドでの販売スペースだ。

そのスペースは5店舗分。元々2店舗はNPCの販売会社が持つスペースで、3店舗がプレイヤーギルドによるスペースだった。

今開かれているのは4店舗。ちゃんと空きのスペースもある。

それはそれとして、NPCであるミルクちゃんの親父さんが卸していたとなると、元々NPC用の会社だろう。

取引相手の名前も聞いておくんだったな……

と、今更後悔しても遅い。まずは様子見だ。

こうしたスペースはきちんと店として存在していて、それぞれ建物がある。個人用の販売スペースは露天商みたいな感じだけど。

先ずは一番左側の店。ラック商店と看板の掲げられた店に入ってみる。

店内はスーパーみたいに広い訳じゃなくて、個人商店くらいの広さだけど、野菜だけとは言えそれなりに量が置かれている。

今更かもしれないけど、この世界にある食材は日本にある物ばかりだ。キャラクター名に食べ物の名前を付けたりしているせいかな、料理名とかは変わっている場合もあるが、文字が日本語なのと同じ様にベースは日本。元々塔攻略以外の生活方法はおまけみたいな物で、こだわりの欠片もない適当な感じだ。この辺りは賛否両論あったけど、正直個人的にはどうでも良い部分だったりする。

ゲームではなく現実となった今は、分かり易くて助かってるけど。

「それはそれとして、相場が分からないな……」

大体どの野菜も、幾つか数を纏めて銅貨1枚で売られている。後で他也覗いてはみるけど、多分それ自体は変わらないだろう。問題は、その内容量だろう。

全部を見るのは大変だぞ覚えきれない為、ニンジンとじゃがいも、レタスの内容量を確認しておく。

ニンジン3本で銅貨1枚。じゃがいも5個で銅貨1枚。レタスは1玉で銅貨1枚。

よし覚えた。それじゃあ次の店に行ってみようかな。

当然何も買わずに店を出る。まずは全部の店を確認して、一番怪しくなさそうな所から聞き込みだな。

そんな事を考えながら、隣りの店の看板を確認するべくやや見上げる。

キャット野菜販売店。そんな看板が目に入ってきた。
まあツツコミは入れないでおこう。
そう心に決めて、俺はキャット野菜販売店へと足を踏み入れた。

白黒判断

店内の様子はラック商店とそう大差はない。
売ってる物もそんなに違いはない。

問題はやっぱり値段か……

と、目当ての野菜を探す。広くない店内だし、直ぐに見つける事が出来た。

まずはニンジン。何と5本で銅貨1枚。

そしてじゃがいも。8個で銅貨1枚。

レタス。これは変わらず1玉で銅貨1枚。

どうやら全ての野菜で落差が出てる訳じゃない様だ。

少なくともラック商店よりは怪しいけど、まだ何とも言えない。

次も見えないと。

キャット野菜販売店を出て、隣の店に入る。今度は野菜専門店・
ナノハナと言う店だ。

ここでも直ぐに目当ての野菜を見つける。

ニンジン。4本で銅貨1枚。

じゃがいも。5個で銅貨1枚。

レタス。1玉半で銅貨1枚。

これはあれだ。生産者との都合とかでも値段が変わるんだな。何を安く売れるのが店によって違うから、3品くらいじゃあ判断が難しいかもしれない。

……いいや頑張るし！

自分の気持ちを奮い立たせ、次の店に向かう。次でとりあえず最後だ。

ワルツ連合商店。そう看板が掲げられた店に入る。

店内の様子はやっぱり一緒だ。だけど、並べられている野菜の値段を見て俺は驚いた。

ニンジン。8本で銅貨1枚。

じゃがいも。10個で銅貨1枚。

レタス。2玉で銅貨1枚。

ラック商店と比べれば全て半額だ。これは驚かすにはいられない
って！

とりあえず、一番の白はラック商店か……

そう判断して、ワルツ連合商店を後にしてラック商店に戻る。

改めて見ると客の数は一番少ない。と言うか俺の他には一人しかない。いくら買い物が客が集まる時間帯じゃないとは言え、他の店はまだまだもう少し人いたぞ……

「すみません」

何の商品も持たずにレジにいる店員に声をかけると、店番らしき
あんちゃんは訝しげな表情をこちらに向けてきた。

「何でしょう？」

それでもきちんと対応してきたのは偉い。

「この店で一番偉い人と話がしたいんですけど」

とりあえずストレートに聞いてみた。

「そう言われましても……」

「私は今回の件を調べている冒険者です。きっと、この店の力にも
なれると思うんですが」

と、それっぽく言ってみる。

「……確認してみます」

流石。この状態でも店に残っているだけの事はある。きっとこの店が好きなんだろう。

好青年じゃん。と、心の中で勝手に思ってみたり。

そんな事を考えている間に、青年は店の奥へと引っ込んで行った。そして待つ事数分。青年が戻って来て口を開いた。

「お会いになるそうです。ただ、社長はここではなく別の場所にいますので、そちらに行って貰えますか？」

いきなり押しかけておいて、そっちから出向けとは言いませんとも。

「大丈夫です。それで、その場所は？」

「本社です。場所はこの紙に書いたので参考にして下さい」

1枚の紙を手渡された。その紙を開くと、南輪狐通り3-5と言う住所と、ここからの簡単な行き方が書かれた簡易地図が載っていた。

「ありがとうございます」

「いえ。応援しています」

どうやらこの好青年にも俺の存在は良く思われたらしい。

俺は青年に笑顔で応じて手を軽く振り、ラック商店を出てその本社へと向かう事にした……

ラック商会

目的の場所には簡単に辿り着いた。と言うか、輪狐通りを道なりに歩いたら通りに面した場所にあったし。これで迷う様な方向音痴ではない。

店名はラック商店だったけど、会社としての名前はラック商会らしい。

ラック商会はレンガ造りの3階建てで、余り幅はなく奥行きはある感じの建物だ。

「失礼しまーす」

木製の扉を開けながらそう言って中に入ると、奥へと伸びる通路が一本目に入ってきた。その両脇には扉がある。左側には二つ。右側には一つ。右側には多分トイレがあり、その奥に階段があるっぽい。

「今行きまーす」

少し遅れて、奥からそんな声が聞こえてきた。多分どこかの部屋から返事をしてきたのだろう。

とりあえず待ってれば良いのかな？

なんて考えた次の瞬間には、右側の部屋の扉が開き中から一人の男が姿を現した。

中肉中背で、特に印象のない平々凡々な容姿の男だ。まだ結構若く見える。30歳には届いてなさそうだ。

「お待たせしました。ラック商会社長のラックです。貴方は……？」

こいつがラックか。社長って考えると本当に若いよな……

「先程商店の方から連絡が行ったと思います。冒険者のクロウと言います。よろしくお願いします」

そう言っ、俺は右手を前に出す。ラックは俺の手を取り、握手を交わす。

「ここで話しするのも何ですから、どうぞこちらへ」

と言、奥へと歩き出すラック。

てっきり出て来た直ぐ右側の部屋に入るのかと思いきや、反対側の部屋に案内された。

「さて。私に話があるそうですが、一体どの様な御用件でしょうか？」

店員のあんちゃんからどこまで話を聞いたのか分からないが、ラックはそんな風に聞いてきた。

直球な物言い自体には好感を持てるし、俺も変化球ではなく直球で返すべきだろう。

「野菜の価格暴落についてです。私はある農家からその調査と解決を依頼されています」

「なるほど。それで？」

「簡単にですが市場を見た所、ラック商会さんが一番被害を受けているんじゃないかと思ひまして。協力体制を取れたらと思ひ声をかけさせて貰いました」

「……まだ若いのに、大した観察眼だ」

自分だってまだ若いだろうに、心なしか老け込んだ様な苦笑を浮かべるラック。

「しかし、もし私が被害者ではなく加害者と言える様な立場だったらどうするつもりですか？」

「現状で利益を減らしてまで被害者を装う必要を感じられません。装うとしても、もっとグレーゾーンに近い感じにするでしょう。もし仮に貴方が加害者側だったとしても、今この場で私と敵対する様な真似は取らないでしょう。仮に襲われたとしても、突破する自信はありますけどね」

「ほう。腕っ節にも自信がある様ですね」

「ええ。そして今この場で敵対しないと言う事は、おそらく形の上では協力する態度を取るはずです。後は、どちらが相手を出し抜けるかの問題ですかね」

「そちらにも自信が？」

「……それなりには」

ラックの言葉に、俺は苦笑しながらそう答えるしかなかった。自信がない訳じゃないが、それはスキルあつての事だ。ゲームとは違い、実際に上手く行くかどうかはまだ分からない。

「分かりました。貴方の提案を受け入れましょう」

今までの問答で、俺の提案を受け入れる決断を下したらしい。

「ありがとうございます。改めて、よろしく願います」

「こちらこそ」

俺達は最初の時と同じ様に、しかし多少違った意味合いの笑みを浮かべながら握手を交わした。

勇み足

ラックから一通り情報を得て、今後の方針を話し合った俺はラック商会の本社を出た。

次に向かう先は再び桜市場、ワルツ連合商店だ。

ラックからの情報で、ワルツ連合商店が原因だと言う事が分かった。

そもそもワルツ連合商店は新参者らしく、急に店舗を開いたかと思えばその衝撃の安値で客足を奪って行ったと言う。

怪しさ全開だ。

はつきり言って、NPCの生活を脅かす様な事が出来るのはプレイヤーしかない。これがそう言うイベントだって言うならともかく、現実となった今はそう起りえない事のはずだ。勿論全く有り得ないって訳じゃないだろうけど……

となると、俺の他にもプレイヤーが紛れ込んでるって事になる。

タワーオブバベルのプレイ中に人が消えたなんて話は聞いた事がないから、あくまでも状況的に可能性が高いつただけで確証は全くない。

そして、NPCを利用してゐるんじゃないければ、相手はギルドを設立している事になる。

ワルツ連合……そんなギルドは聞いた事はないけど、こっちの世界に来てから設立したのなら知らなくてもおかしくないし、そもそも全てのギルドを把握している訳でもない。

結局はもっと踏み込んでみないと相手の正体までは掴めない訳だ。ただ問題がある。相手がプレイヤーだった場合の、そのレベルと人数だ。ギルドは一人でも設立は可能だから、ギルドを設立していたとしても相手が大人数だと決まった訳じゃない。けど、ソロでギルドを設立するメリットがない。

ただ逆に言えば、ギルドを設立し維持するだけの資金があると言

う事だ。維持費用は今回の事件で儲けてるだろうから問題ないかもしれないけど……

大金を有していると言うのは、それだけで脅威に成り得る訳で……

「ああもう！ 考えたって答えなんか出る訳ないし！」

異世界にトリップしたんだ。いくらゲームと同じ様な世界って言ったって自分の常識は当てはまらないのが普通。

悩むだけムダに思えてきた……

そもそも、市場に出店してるNPCの会社名を覚えてない俺が悪い気もしてきたし。

だって仕方ないんだ。

俺は確かに農場運営をしてたけど、市場への販売は行なっていなかったんだから。

俺が作った野菜は全て知り合いに売りつけていた。商売——と言うか儲ける事が大好きな奴で、俺の野菜はそいつが市場に卸すか自分で売っていた。つまり、俺は一切市場とは関与していないとはつきりと言っておきたい。

だからNPCの店名を覚えてなくてもおかしくはないんだよ。

うん。

なんて自己完結している内に、ワルツ連合商店の入り口前に辿り着いた。

「さて。ここからが勝負所だな」

すーはーと大きく深呼吸をする。

相手がもしプレイヤーなら、それこそ1日で解決する事も可能かもしれない。

そうじゃないならそれなりに期間が必要かもしれないし、それでも1日で解決出来るかもしれない。

「様は俺の実力次第！　よし頑張れ俺！」

自分の両頬をビシビシと叩き気合を入れる。

よし行こう！

意を決して、俺は本日二度目。ワルツ連合商店へと足を踏み入れた。

キーマン

店内へと足を踏み入れた俺は、荒事になった時の為にとまずはスキルを発動させておく。

「オートヒール」

小声で紡いだそのスキルは、一定時間受けるダメージを緩和しつつ、受けたダメージを回復すると言う素晴らしいスキルだ。当然緩和も回復も大きなものではない。ステータスが数値化されていないからその値も計算は出来ないが、ゲーム時での設定はダメージの1割を緩和。回復は毎秒HP1の回復だった。

効果の持続時間は10分。これは試しに計ったから間違いない。問題は、効果が切れた後にダメージを受ける状況にならないかどうかだ。

まあ、そもそもダメージを受ける気はないんだけど……

何があるか分からないのが世の常だしね。念には念を。無意味にならない事を祈ろう。

ん？ いや、無意味になった方が安全なのか。

「そんな所でブツブツ呟いてると邪魔なんだが」

入り口付近で立ち止まっていたせいか、新しく入ったきた客にそんな事を言われた。

「あ、すみません」

反射的に謝って、少し横にずれて道を空ける。

ふん。と軽く鼻を鳴らし、空けた通路を進んで行ったのは若い男

だった。

俺と大差ない背格好で、短い黒髪に黒い瞳。そのあまりの不自然のなさに、俺は逆に違和感を覚えた。

「……日本人？」

その見た目は、一般的な日本人のそれだ。俺にとっては見慣れた姿の相手だが、この世界で言えば珍しい容姿。

思わず、そんな風に声を漏らしてしまった。

おそらく男に俺の声は届いただろう。しかし全く反応せずに、そのままカウンターへと向かって行く。

珍しくはあるが、日本人っぽいキャラクターがいない訳じゃないだろうし……

もしかしてプレイヤーかとも思ったんだが、どうやら違った様だ。あいつが敢えて無反応を貫き通した訳じゃなければけど。

どちらにせよ、何一つ商品を見る事なくカウンターへ向かった事を考えれば、今の男はこの店の関係者かもしれない。

そう考え、後を追ってみる。

近付き過ぎれば怪しく思われるかもしれないので、出来る限りカウンターに近い場所で野菜を物色する振りをして聞き耳を立てる。

「調子はどうだ？」

「相変わらずの好調ですよ。でも、本当にこんなに安く売って大丈夫なんですか？」

「心配するな。お前は言われた通りの価格で販売してれば良い」

「……分かりましたよ。こっちも儲けさせて貰ってる事ですし、文句はありませんよ」

何たる堂々とした密談だ。

と思わないでもないが、込み入った話をしている訳ではないし、

会話の内容だけでは特におかしな点はない。

だが、あの日本人風の男が何かを知っている可能性は高いな。少なくとも、あの店員よりは真相に近い所にいるはずだ。

「明日には次の品を持って来れる。いつも通り頼むぞ」

「分かってますよ」

明日ね……

俺としては、このクエストは今日中に終わらせたい。普通に考えればそれは難しい事だが、俺の持つこの世界の知識と同じ様な理で世界が構成されているのなら、事の原因はスキルにあるはずだ。

ゲームであるタワーオブバベルの世界では、野菜を育てると言う行為は全てスキルによって実行されていた。それはプレイヤーだけであって、NPCはおそらくきちんと野菜を育てているのだろう。
マジックアイテム
それでも魔法具のおかげで四季にとらわれない生産を可能にしていた。

おそらく今俺がいるこの世界でも似た様な物があるのだろう。それでも味に差が生まれるという事は、やはりきちんとした生産方法を取っているのだ。だからこそそれなりにコストがかかる。が、スキルを使えば簡単に野菜を作る事が出来る。その品質は基本一定だ。となれば、コストも下がり安価で売る事が出来る。

つまり、今回の黒幕には生産系のスキルを使える奴がいる。それがもしかしたら俺と同じプレイヤーなんじゃないか。そんな風に考えていたんだが……

もしかしたら、単にスキルを覚えたNPC——人間が現れただけかもしれない。

その結論は現段階ではまだ出せないが……

「とりあえず、あいつの後を追ってみるかな」

気が付けば踵を返し、店から出て行こうとしていた日本人風の男。
俺はそんな呟きを漏らしながら、男の後を追う事にした。

戦闘開始

「さて……そろそろ顔を出しても良いんじゃないか？」

男を尾行する事十数分。既にオートヒールの効果は切れていたものの、再びオートヒールを使用する為には発動から2時間のウェイトタイムを要する為、まだまだ再使用する事が出来ない。

そんな状況の中、明らかに人通りの少ない裏路地に入った辺りで男は立ち止まり、そんな言葉を発した。

こちらを向いた訳ではないものの、明らかにそれは俺に対して発した言葉だった。

特に隠密系のスキルを使った訳ではないものの、見つからない自信はあった。どこかで相手はプレイヤーには敵わないNPCだと見くびっていたのかもしれない。

「出て来ないなら、こっちにも考えがあるぞ」

脅しの言葉としては陳腐なものだが、いきなり事を荒立てるのは本意ではない。

仕方ない。出て行くか……

「お前は、さっき店にいた……」

俺がゆっくりと隠れていた木箱の裏から出て行くと、男は驚いた様な表情を浮かべた。

それはそうだろう。多少は怪しい動きをしたかもしれないが、どちらかと言えば俺は目立たない顔立ちをしている方だし、あまり警戒されていなかったと言う自負もある。

とは言え、向こうもやましい気持ちがあるからこそ周囲には警戒

していただろうし、だからこそうして気付かれたんだろう。

「一応聞いておこう。何の為に俺を尾行していた？」

他にも思い当たる節があるのかどうかは分からないが、言い振りがらすると検討はつけているんだろう。なら、誤魔化すよりもさっさと交渉に入った方が早い。

「野菜の価格に関して調べてる。って言えば伝わるかな？」

「まあそうだろうな。で、どこまで掘る？」

「それに答えると思うか？」

と、お互い疑問符で言葉を投げ合う。

「それもそうか。だが、答えた方が身の為だと思うぞ」

前半は淡々とした口調で、後半はどこか楽しげな口調。

ニヤリと口の端を上げた様子を見ると、何となく背中がゾクリとする。

こいつは、色んな意味で危険人物だ。と俺の予感が告げている。

「もし仮にあんたの質問に答えたら、見逃してくれたりするのかね？」

「……それも一興かもな」

うん。逃がす気はなさそうだな。

とは言え、周囲に味方が隠れてる様な気配は感じない。余程自分の腕に実力があるのだろうか。

やっぱりプレイヤーなのか……？

「そうだな……一つ、賭けをしないか？」

「賭けだと？」

俺の唐突な提案に、男はどうやら興味を示した様だ。

これは、早急に今回のクエストを達成する為の一手だ。

「ああ。どうやらあんたは自分の腕に自信があるみたいだし、俺を逃がす気もない。こっちとしても、早く今回の件が片付くならそれに越した事はない訳だ」

「何が言いたい？」

「だから、俺とあんたが勝負をする。俺が勝ったら、黒幕であるあんたは今後一切市場への関与を止める。あんたが勝ったら、俺はあんたの下でタダ働きをしたって良いし、身包みを剥いで貰っても構わない。どうだ？」

この男が黒幕である可能性は決して高くないが、敢えてそう口にした。

タダ働きや身包み云々は、負けた時に殺されない様にする為の口上だ。ゲーム内では死ぬ事はなかったが、現実ならそうはいかない訳だし……

「面白い。随分と自信がある様だな。だが……俺がその話に乗ってやる義理はないな」

「分かってるさ。それに、今あんたが俺の話に応じて、それを守る保障もないしな」

「分かってるじゃないか」

「それでもだ。あんたが口約束でも俺の話に乗ってくれば、俺のやる気が出るだろう？」

そう言って、俺は出来る限り不適な笑みを浮かべる。

「それこそ、俺の知った事じゃないな」

「そう言うなって。それとも、負けるのが怖いのか？」

安い挑発だ。だけど、俺が思うにこの手のタイプは簡単な挑発にも乗るタイプだ。

「良いだろう。その話、乗ってやる。だが後悔するなよ！」

掛かった！

歓喜の余り叫びそうになったが、言葉尻と同時にこっちに向かつて男が跳躍してきた為それを飲み込む。

パツと見た感じ武器らしい物は持っていないさそうだから、徒手空拳で戦うタイプなんだろう。

自分の身体とは思えない程軽やかに、俺は男の振るった拳をかわした。

一度距離を取り、男の様子を窺う。

向こうは体勢と整え、再びこちらに向かってこようとしていた。

……さて。これが最初の戦闘か。気合入れていくかな！

初戦闘の末に……

「ブースト！」

再度の跳躍と同時に、男が叫ぶ様に声をあげた。

肉体強化スキルであるブーストは、近接戦闘を行なうジョブなら大抵使用出来るスキルだ。

その効果は筋力を主にした近接戦闘に関するステータスを一定時間1・2倍にすると言うもの。

ブーストを利用しての急な方向転換で俺の背後へと回る男だったが、どうやら根本的に俺のステータスを大きく下回っているらしい。その動きを目で追う事は勿論、対応するのも簡単だった。

男がさっきまでいた位置へと跳んで、男の攻撃を避ける。まだこちらからは攻撃しない。

男は俺の動きを捉えきれなかったらしく、少し間を置いて俺の位置に気付き驚愕の表情を浮かべた。

「……大した速さだな」

強がりか本気かは分からないが、言葉だけ取れば俺がスピードには自信があるとでも思ったのだろうか。

こっちから仕掛けてない以上、そう考えられなくもないが……本気だとしたら、相手の力量を読む能力には欠けている様だ。しかしまあ……

やっぱりプレイヤーじゃないみたいだな。低レベルのプレイヤーならステータス的には有り得るかもしれないけど、そうだとってもあんな自信は持たないだろう。

「だが、これは避けられるかな……ミラーージュ！」

ファイター

拳闘士系の専用スキル、ミラーージュ。光を放つエフェクトと同時に多数の分身を生み出し、同時に敵に攻撃を仕掛けるスキルだ。分身は攻撃を受ければどんなに弱い攻撃でも一撃で消滅してしまうが、攻撃力はスキル使用者の半分と言う結構優れたスキルだ。分身の数は使用者のジョブとそのレベルによって変動する。

そして現れた分身は一体。はつきり言って話にならない。

「エアープリズン」

その名の通り空気の檻を作り出すスキルで、俺から見て右手にいる方を捕らえる。対象に出来るのは一人だが、その生成スピードは魔法系スキルの中でも随一。捕獲時間は5秒と短めなもの、檻自体にも攻撃能力があり触れた相手にダメージを与える事が出来る。威力は低いけど。

捕らえた相手は分身だったらしく、檻に触れた途端に消滅した。それに気付いた男は一瞬驚愕の表情を浮かべたが、もう止まる事は出来ないだろう。

その判断は正しく、男はそのまま俺に殴りかかってきた。その間は僅か3秒程度だろうか。次のスキルを発動する暇はない。このまま迎撃するならば――

「よつと」

軽く声を出しながら、俺は男の攻撃を難なくかわす。

どんなスキルを発動しても、発動後5秒間は次のスキルを発動する事は出来ない。男が俺の立ち位置に到達するまで約3秒。男の攻撃をかわして、次のスキルの照準を合わせるまでに約2秒。秒数は感覚でしかないものの、何故か使用出来るという感覚はある。

「ハウリング」

俺がスキル名を口にするのとほぼ同時に、男は俺へと視線を向けた。しかし俺のスキルを避ける余裕はない。

発動したスキルは魔法系スキルで、幻術の類いだ。対象に羽虫の大群が耳元にいるかの様な幻聴を聴かせ、更には脳へと衝撃（この威力は低い）を与える事で気絶させる。近いレベルの相手には成功率が低い、この男に十分な効果が期待出来るだろう。

「うっ……」

俺の推測は正しく、男は呻き声をあげその場に倒れ込んだ。

思った以上に呆気なかったな。戦闘への恐怖も、忌避感もないままに初めての戦闘は勝利を迎えた。

自分自身がどうかしてしまった様な気もするが、その事への特別な感情も湧いてこない。

「……今はこいつを何とかするか」

今はやる事がある。戦闘が長引かなくて助かった。

「言霊の血判書」

俺が新たにスキルを発動すると、目の前に一枚の羊皮紙が現れた。ふわふわと浮かぶその紙を掴むと、脳内に契約を交わす内容を求める声が響いた。その声は低い男の様な声で、元々の設定からすると悪魔と言う事になる。

悪魔との契約と考えると多少怖いものもあるが、今回は俺にデメリットがない状態だから問題ない。

本来ならば契約系のスキルはその場で交わさなければならぬが、

天地創造で創り出した言霊の血判書は過去10分以内に交わされた言葉を契約として確立する事が出来る。ゲーム上ではログから選択していたが、どうやら思い浮かべるだけで良いらしい。

俺が男との会話を脳内に思い浮かべると、羊皮紙が一瞬光ったかと思うと倒れている男の元へと飛んで行き、その体内へと吸い込まれる様に消えていった。

契約は成された。そんな悪魔の言葉が脳内に聞こえ、言霊の血判書のスキル効果が終わった。

多分、これで問題は解決するんじゃないだろうか。最初はこの男が黒幕だとは思わなかったものの、言動から察するにこいつが生産系のスキルを覚えたんじゃないかと思う。もし仮にスキル使用者が他にいたとしても、少なくともこいつはもう市場に関与する事が出来ない。

明らかな解決には繋がらなかったのは残念だけど仕方ない。

少しの間、様子を見る必要があるそうだな……

そんな風に思考を纏めて、長居は無用だと判断しこの場から立ち去る事にした……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3672x/>

Tower of Babel

2011年11月21日06時23分発行